

子どもの読書の意義と効果に関する研究

Study on the effect and significance of children's reading

学籍番号：201121706

氏名：有元 よしの

Yoshino Arimoto

戦後、子どもの読書活動の推進、読書環境の整備のために様々な活動が行われてきた。2001年には、子どもの読書環境の充実の必要性に関する議論を背景に、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定された。この法律に基づいて、全国で「子どもの読書活動推進計画」が策定され、地域における読書環境の整備が進められている。しかし、これらの法律や報告においては、読書の共通した定義が見られず、読書の意義が示されていない。

本研究の目的は、読書が我が国においてどのように位置づけられ、その意義がどの程度検証されているのかを調査し、読書研究の課題を提示することである。研究の手法としては、文献調査を用いた。読書活動の推進に関連する法律及び国の政策に関連する調査や報告、学習指導要領、司書課程・司書教諭課程のテキストを収集し、読書がどのように捉えられているかを整理した。読書の意義・効果に関する1995年以降の国内文献を収集し、調査対象、調査方法、調査結果の関係の観点から分析を行った。

研究の結果、以下のことが明らかになった。

海外では読書活動や読書環境の評価に関する研究が行われているが、わが国ではほとんど行われていない。わが国の読書活動推進政策においては、読書に関する共通する定義や読書の意義の解説が見られない。これらの政策は、あくまで地方自治体の自主的な取組の推進にとどまっており、政策の調査や評価が行われていない。学習指導要領における読書・読解の位置づけについては、平成10年の学習指導要領の総則において、学校図書館の活用の記述が見られ、それ以後、読書・読解が国語科の枠を超えて指導されつつある。司書科目・司書教諭科目のテキストにおいては、読書の意義について、「想像力」が高まるという項目が最も多く挙げられているが、全体として、テキストの著者によって様々な見解が示され、共通した認識が見られない。

読書の効果に関する研究の成果としては、幼少時の読書がその後の人格や読書習慣に与える影響について、ある程度まとまった知見が得られているが、多くの研究においては、再試が行われておらず、そのため、得られる結果の範囲が限定されている。

読書研究の今後の課題として、①読書活動の評価基準の研究、②読書活動推進政策の評価と現状に関する調査、③読書の意義に関する総括的な研究、④縦断的手法を用いた生涯にわたる読書の効果に関する研究が挙げられる。

研究指導教員：薬袋秀樹

副研究指導教員：鈴木佳苗